

ほんとうにかんぺきな配慮なのか

1年A組 足立昂樹

僕は社会人弱者と言われている子供やお年寄り、身体が不自由な方々が住みやすい世の中にするためにはどうしたら良いのか考えた。それは、周りにいる一人一人の優しさと思いやりと少しばかりの勇気に尽きるという結論に行き着いた。

僕は、1学期の国語の授業で「ユニバーサルな心を目指して」という視覚障害者の身で書かれた文章に出会った。

この文章では、「バリアフリーとは本来みんながバリアから解放されることを意味するはずなのに、車椅子への対応に留まっていると視覚障害者の立場から言いたくなるようなケースが多く見受けられる。」と書かれている。

要するに、中途半端な配慮しか加えられていないということだ。例えば、エレベーターに点字はあるものの音声案内がないものが多いため、一回一回降りないといけない。なぜなら、止まった所が何階なのかが分からないからである。また、上に行くか下に行くかも分からない。あと少し手を加えれば完璧なバリアフリーになるのに、なぜ取り付けないのかと疑問に思う。これがいわゆる筆者（三宮麻由子さん）の言われる「穴」というもので、作る人も使う人も、もう一度「発想」というものを見つめ直すことが大事になってくるのであろうとしている。僕は加えて、「穴」を埋める、または、少しでも小さくするには、周囲にいる人たちの優しさと思いやりが必要であると思う。

次に高齢者にはどのような配慮が加えられているのかインターネットで調べてみた。すると、「高齢者向けの時刻表」や「階段の段差を少なくする」などが分かった。また、鳥取県では高齢者向けの住宅の中はつまづかないように段差をなくしたり、出入口を広くしたり、手すりをつけていたりしているそうだ。

これらのことも素晴らしい取り組みであるし、住みやすい社会に必要なことではあるが、風呂場の手すりを例にあげると、この手すりを使って立ち上げられる人もいれば、立ち上げられない人もいる。やはり、近くにいる人が大丈夫と一言掛けることにより、より一層バリアフリーも生かされるように思う。

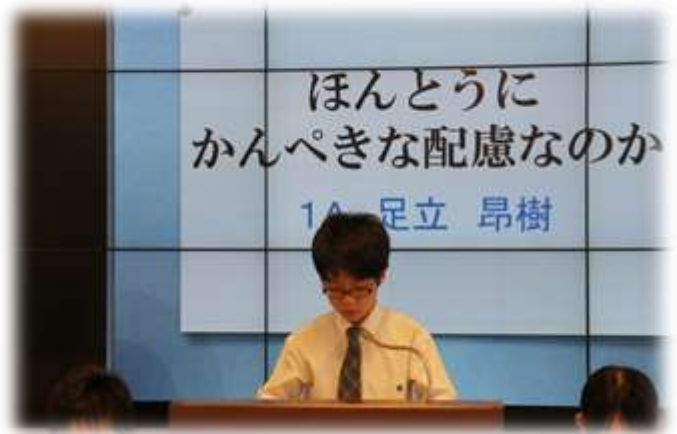
あるとんかつ屋では、赤ちゃんのためにカゴを準備したそうだ。よく食事処で見かける光景だが、このようなちょっとした気遣いが社会的弱者にとってとても助かると思う。

バスや電車にある優先座席を考えても、健常者が座ってしまうと必要な人が座れなくなってしまう。だから、健常者は周りに目を配り、席が必要な人に譲るべきである。通勤時間等、混んでいるときはなおさらだ。朝登校するときのバスでおばあさんが倒れそうになっているのを見かけた。そのとき、後ろの方にいたので声を掛けられなかった。本来、近くにいる人が声を掛けるべきなのだが、ほとんどの人が携帯をいじっていて、気づいていない様子だった。

また、車椅子専用トイレも一般のトイレが混んでいるときは使用されていて、車椅子の人が待っているのを時々見かける。

このように、優先座席や車椅子専用トイレなどいくら良い設備や商品を作っても、健常者が周囲に気を配らず、何の遠慮もなく使ったとしたら、本当に必要としている人が必要なときに使えなくなる。だから、健常者は使う人のことを考え、少しは遠慮するべきだと思う。

最後に、住みやすい社会をつくるために、知恵をしぼり、便利な設備や商品が次々とつくられるが、それを十分生かすために行き着くところは僕たち一人一人の心の持ち方、つまり、優しさと思いやりと少しばかりの通気が必



要だと思う。ですから、これから困っている人を見かけたら、少し勇気を出して声を掛けたいと思う。

今後、すべての人にとって住みやすい社会になることを願いたい。

心の持ち方、そして、「発想」というものがあってこそ、バリアフリーやユニバーサルデザインが手応えのあるものになると思う。